

中学校「授業は英語で行うことを基本とする」後の生徒の学習方略の変容と学習動機

○齋藤嘉則（香川大学教職大学院）

大西範英[※]（元香川大学教職大学院）

キーワード：「授業は英語で行うことを基本」、学習方略（方法）、学習動機

問 題

平成25年12月13日、文部科学省は、「グローバル化に対応した新たな英語教育改革実施計画」（以後、「計画」という）を公表した。そこには、「言語活動を高度化」、「（中学校においても）授業は英語で行うことを基本」などの記述がみられる。

特に、口頭での英語の運用能力を高めるために、現行の高等学校学習指導要領においても、「授業は英語で行うことを基本」として、「計画」では、中学校においても同様のことを求めている。

「授業は英語で行う」ことで、生徒の学習方略（方法）の変化の有無と、英語学習への学習動機（外発的動機か内発的動機か）の状況を明らかにするため質問紙による調査を行った。調査の概要は次の通り。

方 法

中学校において、「授業は英語で行うことを基本とする」授業実践を行い、生徒の学習方略（方法）の変化と、英語学習への学習動機（外発的動機か内発的動機か）の状況を明らかにするため質問紙による調査を行った。調査の概要は次の通り。

- 1 調査対象：D中学校、2学年2学級
- 2 調査方法：質問紙による調査
- 3 調査回収数：62名

D中学校、2年生、2学級において、平成28年5月中旬以降週1回、「授業は英語で行うことを基本」とする授業を8週間、7回から8回実施して、その後、質問紙による調査を実施した。

学習方略（方法）については、「自分の家での英語の勉強方法がかわりましたか」と質問した。

学習動機については、「あなたに英語を勉強しようという『やる気』を起こさせてくれるものはなんでしょうか」との問いに対し8つの選択肢、「外発的動機」に関するもの4つと「内発的動機」に関するもの4つの中から、自分に一番当てはまるものから順次3つを選ぶよう指示した。

結 果

学習方略（方法）は、62名中24名が、「かわった」と回答した。次に、「かわった」と回答した生徒に対してさらに「具体的に学習方法がどのようにかわりましたか。具体的に書き出してください」と質問した。回答は、自由記述で求め、記述された内容を範疇化したものが、Table 1 である。

学習動機の回答結果は、Table 2 であった。

Table 1 学習方略（方法）変化の内容

番号	範疇化した自由記述の概要 (生徒の具体的な記述内容の一部は表外参照)	人数
1	勉強する際に声に出すようになった。	5
2	家庭で自主的に勉強するようになった。	5
3	文法の理解が深まった。	3
4	繰り返し練習するようになった。	2
5	書くようになった。	2
6	語彙を増やすことができた。	1
7	勉強のポイントが分かった。	1
8	おぼえるようになった。	1
9	聞き取る力がついた。	1
10	場面に応じた英語が自然に身についた。	1
11	その他	2
	合計	24

（具体的な記述内容）

番号1・単語や文を読みながら書くようになった。
番号2・英語の意味などを（自分で）調べるようになった。

Table 2 学習動機の状況（単位：人数）

方略変化の有無	外発的動機	内発的動機
有	14	10
無	23	15
合 計	37	25

※1番目に選択した選択肢の実数

考 察

学習方略（方法）の変化があったのは62名中24名で、その中でも英語を学習する際「声を出す」「発音しながら」など音声とともに英語を学習するようになった生徒が5名、「自主的な家庭学習」をするようになった生徒が5名であった。学校で十分な音声のインプットがあるため、家庭学習においても声を出して英語を学び、さらに、家庭学習につながる手がかりを授業中に得て、自主的に家庭学習に取り組む生徒の姿が読み取れる。一方、学習動機は、今回の調査では、方略の変化の有無にかかわらず「外発的動機」が「内発的動機」よりも強く出ている。選択肢から、「よい成績」や「テストのよい結果」を得ること、逆に「悪い成績」を取らないこと、など「成績」の善し悪しにかかわることが動機づけの一番の要因になっている。生徒の成績に対する関心の高さがわかる。